



条件 **3.** 良い関係を築ける家であること

愛着の風景

With your memory

時代や社会が変わっても
スウェーデンハウスが考える
住宅の「スタンダード」は変わりません。
家で過ごす時間が増え
住環境が見直される今
快適のあるべき姿と
それを可能にする条件を考えます。

時の流れとともに。

22歳の春、初任給で自分のためにキーホルダーを買った。デパートのショーケースに飾られていたそれは、木でできていて、魚の形をしていた。手に取らせてもらおうと、なめらかな手触りがなんとも素敵だった。2、3千円くらいだっただろうか。私には充分贅沢品で、それでもどうしても欲しくて買ってしまった。それ以来30余年、私が暮らす家の鍵は、いつもそのキーホルダーについている。細かい傷がたくさんついて、木の色も変化しているけれど手放せない。引き出しの中にどれだけキーホルダーがあっても、代わりになるものはない。

時間が経てば経つほど、ただ古くなるものと、愛着が増していくものがある。その違いは何なのだろうか。

思うに、そこにあるのは「双方向の思い」ではないか。人と人の場合なら、相思相愛といったところか。自分が思うのと同じくらい、相手も自分を思ってくれる…大切に思い合う関係は時の流れによって深まっていく。

The
SWEDEN
HOUSE

THE PERFORMANCE FOR OUR PLANET



CONTENTS

2
[Special 1]
POWER OF SWEDENHOUSE STANDARD
スウェーデンハウス・スタンダード

10
OUR FAVORITE CRAFTS
スウェーデンハウス・スタンダード
銘品館

12
[Special 2]
私たちのうち時間

18
[Technology]
なるほど! そうなんだ!
スウェーデンハウスとムース先生の
スウェーデンハウス紀行

22
[Culture]
私の小宇宙 Sweden

23
[Essay]
ウフフの我が家

24
[Performance]
たがわない約束

25
[Life Style]
mjuk@web information
Enjoy! mjuk×200%

26
[SWEDEN HOUSE CIRCLE]
Good Neighbors

企画・発行：(株)スウェーデンハウス
発行人：村井 秀壽
編集人：大竹 愛子
プロデュース：(株)DGコミュニケーションズ
制作：(株)東北新社

表紙写真：Ulf Lundin/imagebank.sweden.se



モノの場合はどうだろう。物言わぬモノたちが相手では、双方向にはならないのか——？大量生産で、使い捨てられることを前提に作られているモノも多くあつて、残念ながらそれらは、愛着とは遠い存在なのだが、全てがそうではない。モノが存在する背景には、作り手の思いがあつて、その思いは手に取る人へと働きかける。素材やデザイン、機能、色合い：愛すべき存在感は私たちにそつと寄り添ってくる。モノとの双方向はそんな「良い仕事」で成り立つ。また、作り手だけでなく、それを自分に手渡してくれた人の思いがこもっている場合もある。それもまた、愛着の育つ肥沃な土壌となる。

人の思い——愛や希望や思想、そういったものを内側に携えながら、良い仕事をしてくれるモノが好きだ。ともに時間を過ごすうちに、モノはモノ以上の意味を持つようになる。



POWER
OF
SWEDEN
HOUSE
STANDARD

スウェーデンハウス
スタンダード

POWER OF SWEDEN HOUSE STANDARD

スウェーデンハウス
スタンダード



「家」が 「我が家」に変わる時。

スウェーデンハウスが、私にとってただの「家」でなくなったのはいつだろうか。入居すれば書類上は自宅になるが、「我が家」と実感するようになったのは、ある程度時間が経ってからだったように思う。

今までいろいろな場所で暮らしたが、スウェーデンハウスほど経年によって魅力が増し、愛着が育つ住宅はないと私は思っている。無機質な素材とは違い、木でできているという点で、既に人と良い関係が成立する家ではあるが、それだけではない。木でできた家なら他にもたくさんある。前述した双方向の思いというのが、この家と住まう人との間にはとても強くあるように思う。



階段を下りる時にふっと触れた手すりの柔らかさ、窓のハンドルを倒した瞬間に訪れる静けさ、玄関を開けた時の木の香り、美しい佇まい。この家の「良い仕事」を私たちは日々五感で感じ取りながら暮らすことができる。内側で支えているのは、北欧生まれのクラフトマンシップであり、スウェーデンの住思想、厳しい気候で強く育った木々、日本の暮らし方への配慮と使命…。濃くなっていくパインの色とともに、スウェーデンハウスの良い仕事は私たちに寄り添い、私たちは家への思いを深めていく。メンテナンスをしたり、花を植えたり、大切な人と大切な時間を過ごしながら「我が家」を楽しむ。

時流でぶれることのないスウェーデンハウス・スタンダードは、気が付けば私のスタンダードになっていた。





かけがえのない物語。

モノが自分のスタンダードになり、等身大の存在になってくると、安心して思い出を刻んでいけるようになる。関係性が生まれて、一緒に物語を始めることができる。

住み始めて15年が過ぎた私のスウェーデンハウス。仕事柄いろいろな地域のモデルハウスに足を運び、オーナーさんのお宅に伺うことも少なくなかった。家を建てた当初は、その広さや豪華さに「いいなあ」と羨ましく、自分の家に帰るとなんだか急に色褪せて見えたことも正直あった。でも今はそんなことなど一切ないから不思議だ。ピカピカの新築スウェーデンハウスと取り替えてあげますと言われても、即座にお断りすると思う。15年間かけて育んできた我が家だ。お金で時間を買えないのと同じように、私たちのスウェーデンハウスは、私たち家族の15年の物語そのものなのだ。

歩道橋を渡って、遊歩道を少し歩くと、ベニガラ色の我が家が見えてくる。緊張がふっと緩むと、急になんとか不安になって、上着のポケットに手をつまむ。触り慣れた木のぬくもりが指先に伝わる。「大丈夫。」と確かめているのは、家の鍵だけでは足りない。あの春から今日までの、ありとあらゆる自分自身がそこ



文：上西左知子 コピーライター/スウェーデンハウスオーナー 2006年入居



スウェーデンハウス
スタンダード

【掲載モデルハウス】
所沢モデルハウス

【モデルハウスインフォメーション】
スウェーデンハウスのモデルハウスには、一つ一つの家にも、安心して暮らせる心地よさがあります。また築年数を重ねて味わいを深めてゆく、それぞれの美しさがあります。ぜひ実際に見て、感じてください。

<https://www.swedenhouse.co.jp/modelhouse/>

